

高学年児童の体育及び運動に対する意識に関する研究

－ 体育が好きで運動に苦手意識がある児童に視点を当てて－

小山薫（東京学芸大学）

1. 目的

本研究の目的は、「体育が好きで運動に苦手意識がある」児童の体育の学習に対する意識を、質問紙調査を通じて明らかにするとともに、児童が将来的に運動することに対して好意的な意識を醸成していくための視点を得ることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者 都内2校の小学校高学年児童 266名
- 2) 調査方法 体育授業や運動における児童の意識についての質問項目（選択技法及び5件法）から質問紙を構成し、回答を得た。
- 3) 分析方法 因子分析（主因子法・Promax 斜交回転）を行い、対象者の属性及び4群（Ⅰ群：体育が好きで運動に得意意識がある、Ⅱ群：体育が好きで運動に苦手意識がある、Ⅲ群：体育が嫌いでも運動に得意意識がある、Ⅳ群：体育が嫌いでも運動に苦手意識がある）による意識の比較を行った。

3. 結果と考察

- 1) 「実態」については、調査対象者の内、Ⅱ群児童が全体の約30%であった。また、「体育が好き」という理由として運動の得意意識だけではなく、他の意識や要因をもつ児童が存在すること、女子は男子よりも運動技能に対して苦手意識を感じていることも示唆された。
- 2) Ⅱ群児童の意識を規定する「要因」については、「運動の得意・苦手」の他に、体育授業で注目されることや教師との関わり、教師・他者への貢献、教師・他者からの評価に好感や関心を見出していることが明らかとなった。また、それらが「体育の好き嫌い」に影響を与える要因となり得ることが推察された。

- 3) 一方、他者から「注目」される活動、特に児童が得意・苦手意識を感じやすい運動学習に関する活動は、運動が苦手な児童は消極的になる可能性が示唆された。教師は児童に注目されることによる劣等感や失敗経験を感じさせないような工夫が必要だと考えられた。

4. 結論

本研究では、「体育が好きで運動に苦手意識がある」児童は「注目」「教師」「貢献・評価」に関する活動に好感や関心をもち、運動学習に関する「注目」される活動には、好感や関心を見出しづらいことが推察された。したがって、体育授業において児童が好感をもてないと考えられる活動に対しても「教師がどのような意味をもたせるか」が重要になると考えられた。そのような教師の関わりによる児童の変容が運動することへの好意的な意識の醸成につながるだろう（図1）。

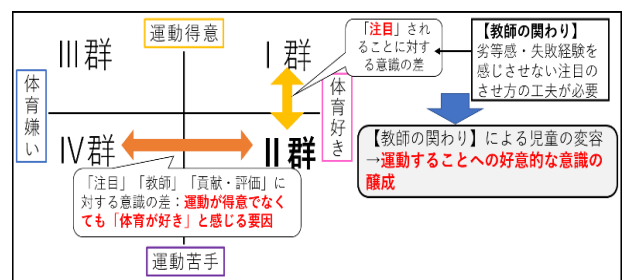


図1 児童の体育及び運動への志向と教師の関わり方の関係

5. 主な参考文献

- 1) 吉川麻衣・山谷幸司・笹生心太, 「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究－小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して－, 仙台大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 13:107-116, 2012.